こゝろの光

十二光の巻

霊の糧……一
人格的本尊……四
無量壽……八
無量光……一三
無邊光……一八
無量光……二〇
無邊光……二四
如來の三身……二九
如來の光明……三一
無量光……三一
無邊光……三二
無碍光……三三
無對光……三四
炎王光……三五
清淨光……三七
歡喜光……三八
智慧光……三八
不斷光……三九
難思光……四一
無稱光……四三
超日月光……四二

霊の糧

宗教と云ふものは宇宙に唯一の偉大なる尊き如來と衆生の信仰との心が合する處に信仰は成立するのであります。

如來は宇宙一の大みおやにて私共の心霊は其子であります。經に三界我有、其中の衆生皆我子と仰せになつてある。私共の心霊は本如來の子であるけれども一度迷ひ出て無明の闇に迷うて現に私共は霊の親様を知らずして淺間しき罪惡の凡夫に墮ちて居るのであります。罪と惱のある子等を大みおやの慈悲の深さより救の道を開く爲めに過去の世に御出ましになつて、大みおやの慈悲を示すために、五劫に思惟をこらし淨土の門を開きて大みおやは報身の阿彌陀如來と現はれて、慈悲の光明で衆生界を照らして賜はるのが親の慈悲であります。親様は宇宙に充ち溢るゝ慈悲を以つて私共を御懐の中に攝めて子等が霊性を霊育して、その染汚たる霊をきよく霊くして下さるのであります。

其親様の慈悲を知らせんが爲めに、また近くは釋迦牟尼世尊と此の世に御出ましなすつて、大みおやの聖旨を私共に一代專ら其眞理を敎へられたのである。佛陀が斯様に敎へられました。如來の光明普く、全く一心に念佛して至心不斷なれば、小兒の稍大きくなるに隨て母の慈愛の溫容を觀て悅ぶように、私共の心霊も信念が增長する時には、最も慈愛深き霊の溫容に接しつねに、みおやと共にあるの信念が確となるのである。小兒を乳によりて育つる如くみ親の慈悲の乳房を含めらるる。法乳をうくるは霊心を養ふ糧である。私共の信念に於てあなたの恩寵を專ら憶念して心に法乳をのむのであります。稍信念進むに隨つて其霊に於て味ふ處の妙味は言の及ばぬ處是を法悅と申します。春風怡蕩徐ろに花の開く如くに、心霊の花の咲きし時感ずる處の霊の氣分はいかに魂を養ひ霊を潔快ならしむるものぞ。

此の微妙不可思議の妙味を感ずるほどの霊の糧によりて養はるゝ霊ほど霊福はありませぬ。

宗祖法然上人の溫容藹々たる玉の如きの人格はみ親の霊喰によりて養はるゝ霊は其の人格を爲したまふたのである。誰人にても其霊の乳を受けさへすれば霊に育はれて麗はしき人格となり、この世に聖き魂となりたれば、永遠の生命となる。

人格的の本尊（註―同内容のもの既刊）

光明主義の本尊は永遠に活ける彌陀尊なり。理想最高の本尊は絶對的宇宙の中心最高處に儼臨し玉ふ獨一不二の無上尊にして一切諸佛萬法を統攝し玉ふ最尊者にして、而も一切の信者の爲めに各自の信仰に應じて靈應の身を分ちて其人の前に在す。衆生の心想の中に住し玉ふ。衆生の心相各々不同の故に感應する處の身色相好もまた不同但し歸する處は其人の信仰の本尊となりて、一切の處一切の時に於て其人の心意を統攝し指導し益向上せしめ玉ふ活ける本尊なり。

若し小乘教に於ては五分法身を各自の本尊とす。

釋尊御入滅に臨みて若し我世に住すること一劫すとも、會ふものは亦當に（滅）すべし。會ふて離れざること終に得可からず。自利々人の法皆具足せり。若し我久しく住すとも更に益すること無けん。應に度すべきものは若は天上人間皆悉く已に度しぬまた度せざるものには皆亦已に得度の因緣を作しぬ。自今已後我が諸の弟子展轉して之を行せば則ち只如來の法身常に住して滅せざるなりと。如來の法身常在不滅の法身をして（　）之を小乘教にては五分法身また波羅提木叉と名づく。聞く所によれば印度の小乘教にては得度式は作法によつて五分法身を授け、そが其得度者の頭腦（　）する本尊として斯の戒體が發得して精神生活を支配するに至ると。

今大乘佛教にては教祖釋尊初めて正覺を成じ已るや、梵網戒三味に入つて本佛盧舍那を本身として千と百億との釋迦は各無數の眷屬と共に本佛を圍繞して本佛より道德律の根本たる戒法を聞くと。然れば即ち人佛釋尊の精神界には常に本佛盧舍那佛が道德律の本尊として常に儼臨し玉ふこと必せり。

盧舍那佛即ち彌陀尊なり。

已に信心獲得したる上には**ナムアミダ**佛が實現し來る。

ナムとは我等衆生の心の全心全幅を捧げて歸命信賴することなり。

アミダ佛は我等が信念の前に大威神大智慧大慈悲を以て常恒に嚴臨し玉ふ靈體なり

ナムアミダ佛と申す時、**ナム**の信念の前には常に彌陀世尊嚴臨し玉ふ。

至誠心の念佛の前には彌陀現在し玉ふ。されど衆生の信心の鏡曇る故に現前せざるなり。

導師曰く彌陀身心遍法界、映現衆生心想中。

念佛三味に明鏡を磨せよ。

念佛。南無の一心の對衆には彌陀常に現在す。彌陀は必ず在せども衆生心想の鏡曇るが故に現前せず。しからば云何して一心を明淨にして如來の身色相好を映現することを得となれば、衆生鏡を磨くは只念佛三味のみありて能く心鏡を磨きて明淨ならしむ。

念佛三味とは衆生の一心と如來心との合一的其兩者の間に寸隙もゆるさゞるなり。念佛三味のよく純熟する人の心は明鏡の如し。然るに其修練の一心の用心に於て巧妙なる者と拙劣なる者あり。例へば鏡を磨くに巧拙あるが如し。また能く劍道の達人能く奥妙に達するものは一寸また五分の隙を見せずと云ふ全く物我無二となると。如來と我と合致して寸隙なきに至る。其樞契の機の深甚言語を以て傳ふべからず。彼の宗教的天才なるものは其本能的に一心が對衆の境と契合して自づと三味の境に入ることを得るなり。然るに天才の人は稀なり、たとひ宗教素性に乏しき人にても一心に自己の業障の甚深なることを自覺し尅克摧勵して一心に勇猛精進にして不屈不撓なれば必ず從來の不靈體なる己が心機を打破して奥底に潜伏せる靈性現前して一心の明鏡明淨にならん。故に天性拙なりと雖必ず自棄する勿れ。またたとひ天才豐富なるも一心に摧勵せざれば眞實の妙を得ること能はず。

無量壽（本佛と迹佛）　法身佛、現身佛

頌曰、本有法身阿彌陀尊　迹を十劫に垂れましゝ
本迹不二なる靈體の　無量壽王に歸命せん。

無量壽は如來の壽命無量は、本如來は絶對無限永恒存在なれば已に時間を超絶せり然れども時間と空間との規定を受けたる衆生の爲めの顯現には、超時間の如來を表はすに時間に徧在せる壽命無量限を表はし、而して如來は無量に量を顯はす故に無量壽の名を以て堅の德を現はす。

如來に本佛と迹佛との二身あり。法性法身と方便法身の二身を以て本迹を顯はし、また法身佛と現身佛の名を以て如來の德を表明す。二面を表はす。本法身佛は實に無量劫の壽命、時間に徧在せる佛陀、迹佛は衆生界に現ずる應化の身。法華壽量品の久遠實成の如來は、如來實に成佛して已來無量無邊阿僧祇劫五百塵點劫已來の古佛、之を久遠實成の如來と云ふ。本來本佛は諸佛如來の一大本體眞實無量壽如來、常住に大般涅槃界に在して、三世諸佛の本體にして、無始無終の靈體なり。本有無作の法身は自然に無量無邊の功德具はりて一切諸佛の依なり。如來自性清淨の實在する方面は凡夫には覺知思慮分別を以て測覦すべきにあらず。一度生死界に迷ひ出したる衆生の爲に時々衆生の爲に應現するを迹佛とす。絶待無限の本有の佛境界より衆生の爲に現身佛を以て應現す。故に法華經に昔燃燈佛また其他の無量の佛陀の名と形とを以て久遠劫の昔より番々出世の諸佛は皆名字も年紀も不同なれども、そは衆生の爲に應現したる上にこそ名字も年紀も不同なれども、衆生界の方を出て佛自性の自境界に入つて見れば、本來の佛で、久遠已來娑婆に出現して新たに成佛の身を現す。朝々海水に面を沐して東滄に新たに出る日光は實には久しき昔より唯一の太陽に在ます。然れば即ち毎日々々新たに出、其光輝を六合に發射して止まざる太陽の如く、如來は無量壽永恒に存在すれども衆生の爲に新たに八相成佛の化儀を示して番々出世す。法華經には過

去の燃燈佛より乃至今の釋迦牟尼佛に至るまで無量百千の應化身を以て娑婆世界に出玉ひしなれども本佛は法身常住の靈體に在ます。法華の本佛即ち今調ゆる無量壽如來にして、大經の法藏比丘發心の應身五劫思惟し兆載永劫の修行乃至十劫正覺の身を現したるも、法華の燃燈乃至釋迦牟尼とは同一の化儀を娑婆に示したるものにて、現在世の釋迦卽ち久遠劫の彌陀、十劫正覺の彌陀同じく現身して衆生を誘引し玉ふ佛陀なり。法華は久遠の燃燈より近き釋迦を以て諸佛を代表し、無量壽經は法藏發心十劫正覺の迹佛を以て一切諸佛を代表す。十劫正覺と云ひ、久遠實成と云ひ同一遠近は衆生に對する方便身、近く十劫に正覺を成ずるに、何んぞ夫れ久遠實成なからん。久遠已に實成す、何んぞ十劫正覺なからん。久遠と十劫とは同一の異方面に外ならず。

そは大經の五十三佛の出世順序を說かんに、久遠無量阿僧祇劫に錠光佛出世して衆生を敎化し、後に滅度し玉ふて、次に光遠佛出世し、乃至次第に經歷して五十三佛の最後を世自在王佛にして、法藏比丘は此佛に隨つて出家發願して竟に四十八願を以て衆生を攝取し玉ふ。永劫の修行已に成じて十劫已前に正覺を成じて今現に西方安養界に在すと。また異本には過去無量劫の錠光如來を起點として其前に光遠佛其前を月光佛五十三佛の前に遡つて佛出世し、世自在王佛と曰ふ。此說に依れば無量劫の錠光如來より展轉して無量劫の前佛の世自在王佛の所に發心、法藏と云ひ、異本には錠光佛より後に出世して五十三佛の世自在王佛を說く。異本の說に比するに甚だ杆格の人類を待つて始めて照らすに非らざるに似たり。是れ本より如來は絶對永恒の存在にして未だ必ずしも衆生を待つて爾後に成佛するにあらず。之れ有佛無佛性相常然にして、たとへば太陽の光照は地上の人類を待つて始めて照らすに非らざるが如し。然れども亦一方より見れば諸佛の出世は全く衆生の爲なり衆生を待つて始めて出世し、全く衆生の爲めに化を施し玉ふ。若し全く衆生なくば諸佛出世し玉はずとも云ふべけん。

法身佛と現身佛との異方面の中、法身佛の絶對無限の方面は、若し華嚴の說に依れば、十佛の自境界、十地の菩薩も覦測すべきこと能はず。また密家によれば大日自證

の法界宮絶對永恒の自爾法然の如來、常恒に十方に徧在し、一切萬物の中に說法し、衆生其中に在つて自から知ること能はず、衆生は念佛三昧に因つて其內面甚深の靈妙不可思議の境界に證入して自覺すべきのみ。また念佛三味を以て此に契合するを得んも、然れども無量壽の如來自境界にして一切諸佛の本體なり。三世諸佛は此本佛より出世して、或は大通智勝佛と爲り、或は十六王子の發心と現じ、乃至十方の諸佛と現じて其土の衆生の爲に敎化度脫の妙用を施し玉ふ。近く釋迦尊と成て八相成佛して衆生を度し玉ひき。尙靈未來永恒に番々出世して常恒に衆生濟度の道を講ず。是釋尊は彌陀佛の示現に外ならず。名號功德因緣經に法藏菩薩無量の行願を成じて今現に安養界に在ますと云へども其實は本有法身久遠實成の無量壽佛なりと。乃至無量壽佛は或は梵天帝釋輪王(小王)乃至無量の身を現じて衆生を度し玉ふ。本有法身常住無量壽佛は即我此釋迦の身是なりと。斯經を以て證すべし。唯一の本有法身無量壽佛が一切諸佛の本地にしてまた常恒に應化分身して現身佛と成て衆生を度し玉ふことを。無量壽は堅を云。永恒に亙て一切諸佛の本體として現身佛の本地なることを現す。

無量光

頌曰、十方三世一切の　法報應の本地なる
獨尊統攝歸趣にます　無量光を頂禮す

是偈は彌陀尊は十方一切諸佛の本佛なることを明す。古來、彌陀尊と諸佛との關係の區別を說くに種々の主義あり、此に就ては宗敎に三種あり、一神敎、二汎神敎、三超在一神的汎神敎

一神敎は基督敎の神は一神敎、只神のみ神性にして衆生には本神性具せず。然れども神に救はるゝ性あるのみ。衆生は根本的罪惡にして獄火に燒かるゝ外なし。然るに基督が衆生の罪に代りて贖ふ故に基督を通じて神の慈愛を信じて救はる、と。佛敎眞宗の彌陀佛に對する觀念もまた一神敎的なり。二、佛敎の中禪及び天台華嚴等の主義

は汎神敎である。一切衆生悉有佛性、自己の自性天眞の佛性顯示すれば本來佛なりと。從來の淨土敎の彌陀尊は汎神敎的の彌陀なり。何となれば十方諸佛の中に彌陀に歸し奉つるは彼佛の本願我等衆生を攝取して捨て玉はぬ故なり。彌陀も諸佛も本來同等の佛なれども只衆生攝取の本願が他に超てをる故に他佛に撰びて彌陀に歸すと云ふが如きの故なり。三、超在一神的汎神。斯主義は本唯一絕對の神より出たる一切衆生なれば衆生に佛性あり。然れども柢本中心の獨尊にして一切諸佛を統一し一切萬行の歸趣する處の神尊に歸命信順し其獨尊無量光の光明に攝取せらるゝにあらざれば佛性を開き煩惱を靈化して成佛すべきにあらず。彌陀尊は十方一切諸佛の本師本佛にして一切諸佛中の獨尊にして一切諸佛萬法を統攝して萬善萬行の歸趣する處彌陀に在り。

故に楞伽經に十方三世一切諸佛の法報應の佛及び諸菩薩聖賢變化身等は悉く阿彌陀佛國より生ず、と。是諸佛の本地なるを證す。また斯經に無量壽佛威神光明最尊第一にして諸佛の光明及ぶこと能はずとは獨尊の證なり。また般舟三味經に三世一切諸佛は念彌陀三味に依て正覺を成ずとは是歸趣の證なり。

是の如きの義の故に斯光明主義の彌陀は超在一神的汎神。一切衆生が彌陀の光明に攝取せられて而して後佛道を得る時は一切諸佛菩薩の爲めに其光明を敷せらんこと亦今の如くならんとは是一切衆生が諸佛と同じく成佛を得と明すが故に汎神なり。斯光明主義は超在一神的汎神敎にして最圓滿に發達したる主義なり。

宗敎には全宇宙に唯一獨尊の靈格が在まして唯一の斯如來の外に我等一切衆生を攝取し靈化し玉ふ御方はましまさぬ。例へば宗敎主體なる衆生の身體中に五體四支五官五臟六腑等の、乃至四百兆の細胞の一大團隊が我等一個の人間である。斯一個の人に斯く無數の團隊の中に頭腦の王宮に在ます心靈が卽ち獨尊の主である。一家には家長あり一國には皇帝若くは大統領ありて有ゆる國民を統一する中心と爲てゐる。天體には太陽が中心と成て數多の星宿を統率してゐる。斯く其上〳〵に統一的中心あり最

終宇宙無限の絶對的中心獨尊なくてはならぬ。若し之が無くば宇宙全一に通ずべき眞理の統一を失ふ。斯唯一獨尊を大乘佛敎では何と名づくとなれば、釋尊は無量壽如來の威神光明最尊第一にして諸佛の光明及ぶこと能はざる處と。卽ち無量壽また無量光アミダの名を以て獨尊として一切諸佛を統一し玉ふ中心となす。斯眞理を明にして始めて完全なる宗敎心が成立す。是超在一神的汎神敎とする所以なり。

無邊光

頌曰、如來無邊の光明は、四大智慧のすがたにて、
　　徧く法界照しては、衆生の知見を明すなり。

如來は全體として云はゞ宇宙全體が一の如來心であれば智慧も無邊際、如來の法體無邊際の故に遍照である智慧もまた無邊際。無邊際に遍照してゐる智慧を大と云ふ。

光明主義は唯識論とは其根底に於て大に異なるも、また識論を轉用することあり。

六凡の衆生は識に依て住し如來は智の世界に在ます。宇宙全體がピルシャナなる法身佛に在ませども、如來は宇宙全體が本來自己精神中なれば、如實に知見し玉ふ。然るに六凡の衆生は大智慧光明中に在り乍ら自から闇黑の識を以て世界萬物を認めてゐる。

凡夫の識――俗に云ふ靈魂――は阿賴耶識を以て本とす。阿賴耶識は有覆無記とて善でも惡でも無くぼんやりした態にて、赤兒でも成人でもアラヤは同じで、醒ても眠ても同じこと。賴耶は眠もせず醒もせず。例へば玉の璞のまだ琢磨せざる如きの態にて、此心體、玉が能く琢磨して內外に映徹せる如くに、識が轉じて佛の智と爲る時は盡十方に三世に徹照して遺すことなくなる。

凡夫の靈魂を識と云ふ。卽心の本體である。本如來藏なる宇宙全一の心體を根底としながら、夫れが悟れずして體がぼんやりしてゐるもの故に、此身體以外は全く自己とは別な物と認めて、末那の爲に個體を吾我と分別してゐる。而して其阿賴耶は本

人間とも畜生とも固定性のなきもの故に、業に隨ひて種々に轉變す。之を全體から云はゞ一心十界として十界何れにも成り得らる性を具有つてゐる。其中に就て迷の凡夫の心を賴耶と名づけしにて、例へば水の本質は同一なれども種々の混淆物の種類が無量の故に井戸水が悉く其性分を異にしておるやうなものである。善惡の業の云何に依つて六道と分れ、其心識が業に隨つて地獄と爲る時は身も國土も悉く地獄を現ず。餓鬼の業にて心識が餓鬼と爲る時は自體及國土も悉く餓鬼道と化現す。されば餓鬼と爲る時は性質も身體も性分も働きも悉く餓鬼と爲る。人間の業を以て人間に生れば心性も身體も國土も人類相應して現じて人間の事が能く了解る。

餓鬼と人間とは同一の處に在れども自分の業識に依て唯自分の境界のみを覺知して他を見ることはできぬ。

佛の說によれば今此處に餓鬼道の衆生も居るけれども業識を異にしてゐる故に人間は餓鬼を見ること出來ず餓鬼道の衆生も人間を見ることはできぬ。同一宇宙間に於て各自自らの業識にて自己の境界丈けを感覺してゐる。されば論に一水四見の喩があり水は本同一なれども衆生の業識に依て各々別々に見てゐる。人間は水と見る物を魚類は空氣態に感じてゐる。餓鬼の衆生は熱態にて非常に苦しき物と感じ、天人は水を見ること瑠璃と見てゐると、されば只同じ法界の中に在りて人間は人間の業識に依つて娑婆の人間界と感じてゐる處を佛は佛智の光明を以て見れば此處が卽ち淸淨寂光の國土と見玉ふと。

無量光

十方三世一切の　　法報應の本地なる
獨尊統攝歸趣に在す　　無量光に歸命せむ

無量光の下三光は如來の體と相と用との三大にして、宇宙に徧在せる性と能とであることを明す。初めに無量光佛は十方三世諸佛の本地にて諸佛の根本にてまた終局であることを明す。佛教は汎神教であるから一切衆生に悉く佛性が具備して在る故に其佛性が圓滿に顯はるれば覺行圓滿の佛陀となりて三千大千界の教主として其中の衆生を救度する靈格となるので、衆生も無限なれば成佛したる佛陀もまた無量である。其は皆な釋迦牟尼の如くに其佛陀には何れもみな法報應の三身が具はりて異なることはないと。凭く諸佛は無量に在ますなれども一切諸佛を統一する本地の如來在ます。即ち是無量壽佛である。　切の佛陀は彌陀の法身より出でゝ竟に彌陀の心光に攝取せられて竟に佛陀の大覺位を證す。故に彌陀は諸佛の本地にて諸佛は彌陀の分身なり。彌陀と諸佛とは一體の二面にて一面よりは彌陀にしてまた一方よりは一切諸佛と見ゆれ。故に彌陀を離れて諸佛なく一切諸佛と現はれて彌陀の靈德を衆生に教へ給ふ。

藕益大師も阿彌陀經要解に彌陀は六方恆沙の諸佛を統べ、恆沙の諸佛は即ち彌陀一佛に歸すと釋せり。

彌陀は十方の法報應の諸佛菩薩の本地なることは楞伽經に示されてある。されば彌陀は一切諸佛の本源にて亦一切萬法を統べて萬善萬行の歸趣する所である。故に彌陀は諸佛と萬法の宗致なれば、獨尊と統攝と歸趣との三義あり。即ち根本と中心と終局とも云ふべきなり。

獨尊。宗教心を建てんには先づ第一に自己が歸命信頼すべき絶對無比に唯一の尊き靈格の存在を信認するのである。此の尊きものは如何なるものも相對比すべきものなく絶對的に尊きものにて斯を外にして我を救ひ我を度す者あることなく、唯だ斯の絶

對的に尊き物のみ我を攝度し給ふ力あるものと信じて、絶對的に依屬するのである。其絶對的に尊き靈格を無量壽佛と云ふのである。釋迦佛陀が示されたる彌陀は實には一切衆生の本覺の父にて衆生心靈の根本である。是眞理に迷ふて生死に在るを衆生と云ひ、本覺の眞理なる無量の光と無量の壽とを證り得たるものを佛陀と名づく。無量光にして無量壽なる靈體が一切諸佛の本尊である。故に獨尊と云ふ。

統攝。宇宙には一切の萬法を統べて攝理する理法が存す。一切萬物の如何に微少なる物にまでも法則がありて行はれて居る。いかに複雜極りなき物々にも整然たる條理が存す。一切の法則の大原則であつてすべてを統一し攝理して居るのが卽ち彌陀法身である。萬物の無限に渡りて理の存在を照して明かに悟らすが無限の光明である。其一切に總べてに具はる理法を悟らざるのが凡夫にて、一切の彌陀の攝理し給ふ眞理を悟るものを佛陀と云ふ。故に彌陀は一切諸佛の正覺の眞理を統攝し給ふ無量光である。

歸趣。宇宙間の流行せる萬物は偉大なる神の終局目的がありて其目的に攝められて永遠の靈界に歸趣するや否やは何にしても、矢張り佛經にも一切の衆生は法身より出でゝ法身に還らざるはなしと示し給ふなれば、衆生彌陀の法身を本覺の父とし佛性は伏藏しながらも無明の闇に迷ひ生死に流轉す。

法身無量光の一切衆生を攝取して常住涅槃の都に歸趣し給ふ靈力は本然として宇宙の大道として其勢力が行はれつゝ存するならんも、其は無明に迷ひたる衆生にはとても其大道は見出すこと能はず。爰に於て無量光佛は法藏比丘と現はれ、攝取本願力を以て衆生が慈悲の父の聖意を信頼すれば必ず無量光明の涅槃の淨土に攝めて諸佛同體の證り無量壽國に歸せしめ給ふ。唯だ衆生が己が生死の迷凡夫自身の迷なるを認め、如來本願の大靈力に歸すれば、自然に無量壽の涅槃淨土に趣くのである。一切諸佛も悉く絶對の大靈力に歸順して無量壽の本覺に歸す。故に般舟讃に、三世諸佛念彌陀三昧に依つて正覺を成ずとは此義である。

寔に宗教の宗致とする所は絶對無限なる不可思議の力即ち靈格に歸命し、無限なる光を以て空間に遍照し永遠無限の存在なる如來に歸趣するを以て終局とす。故に斯の尊に歸命信賴して永遠の攝取を仰ぐものである。

無邊光

如來四智の光明は　一切諸法に照り渡り
衆生の知見を開きては　一切種智を悟らしむ

如來は宇宙の大心靈にて無邊光は大智慧の相である。如來大智慧の光は徧ねく法界を照して遺すことなく、而して衆生に佛智見を開きてすべての眞理を悟らしめ諸佛と同じく四智を得さすのである。喩へば日光の照す所眼ある者は種々の色相を見るべきが如く、如來の智光は衆生の心眼に對して靈界の眞理を知見せしむ。智慧の萬法を照すに實に無邊なれども、人の心理の分類の如くに四種に分類して四智となす。

大圓鏡智。如來の大智慧は宇宙大なる觀念の鏡に十方三世一切の物色も心象も依報正報も同時に悉く炳然として遺すことなき象である。吾人衆生の心は阿賴耶識と云ふので只だ現に自然界の天地萬物森羅萬象の中に於て物質と心象との二方面に森羅萬象を認識して差別を認めてゐるのである。絶對の內面は識ることが出來ぬ。若し如來の大圓鏡智を信じて衆生の心が開發せらるゝなれば、宇宙は一大觀念の鏡の智にて、主觀も客觀も同じく一體の絶對なる大智の中に、十方三世一切の色心依正は顯然として現はれ、吾人の觀念がもと大圓鏡智の分れであるものなれば、今は如來の智慧と自己の心とが合一して、自己一大觀念中の宇宙萬有と直觀せらるゝのである。此を大圓鏡智となす。

平等性智

如來の性智とは絶對の理性とも名づくべきか。本然自性の智慧の上に立ちたる世界の萬物なれば、萬物の生成にも因緣因果として行はれてゆく中に秩序あり條理ありて

一切に內存して完全なる理性がなければ能はざるが如くに造化の作用あるは即ち萬物內存の理性智である。衆生の自我の理性とも云ひまた感情の我と云ふも平等性智の分を授與されたものと見做すことをうべし。吾人の自我の根底は平等性に基づくべきなるも、世界の種々の因緣に規定せられたる形氣の我は人々種々千差萬別の氣質を受けて我と云ふものが種々に變じて十人十種の我の氣質と變化してゐる。而して大本の同一の眞性から一致すべき本性は隱れて皆な分別して我と執す。

若し如來の絶對なる大自我の光明に照されて衆生の我の本然自性が顯現すれば諸佛と同じく平等理智なり。禪家は我の根底なる本源自性天眞を直驀に直覺するを目的となす。

妙觀察智

如來の大智は法界に遍ねく照して一切事理の萬差に亙りて微細に照し給ふて、また衆生の佛智見を開きて一切の眞理秘密の寶藏を啓きて衆生に悟達せしむるは此智である。宗教としては斯の智慧の範圍が最も廣く最も深く、實に一卽一切重々無盡、不可思議の交渉の中に無限の眞理を發見せしむるは妙觀察智の作用である。人が自然界の事理に理を發明しまた認識するは此の智が人の智力として現はれたのである。

斯智の作用は華嚴に所謂一卽一切、重々無盡の交渉なるの中に於て悟らしむ智である。萬德圓滿の如來と衆生とは明閣同じからず。されども尙ほ感應の理ありて衆生と如來と入我々入、三密融合を完うし、淸淨の佛心衆生濁亂の中に投ずれば凡夫の濁心自ら淸らかになる。體と用とに相卽相入、重々の關係、一卽一切、一切卽一、一入一切、一切入一、等、一微塵中に一切世界の微塵を容れ、一月天に在て影萬水に浮び一切無數の星は一の眼瞳に入て遺すことなし。深入禪定、見十方一切佛、一衆生心に十方無量諸佛は入り給ふ。十方一切衆生無量無邊一時念に彌陀一佛を念ふ時彌陀は十方一切衆生の心中に入り給ふ。

彌陀六十萬億高大の佛身十方一切の分身、十方一切世界の衆生に光明攝取の功を

施しながら吾人信念の一心に入り給ふ。彌陀我に入れば凡心轉じて佛心と化す。光明到る時闇黑滅す。

若し妙觀察智の妙を證得する時は身此所に在りて心常に淨土に在り。此心卽ち是れ佛、是心是佛、諸佛正徧智海は凡夫心想の中に住し給ふ。衆生をして佛と化し此土をして佛界と化するは此の光明なり。

如來の三身

大乘佛敎の要を知らんと欲せば、先づ如來三身の說を能く了解し玉へ。如來は本一體なれども、一方には一切生物を產出する本と爲り、一面には衆生の心靈を長養して永恒の常樂に攝め取り玉ふ身を現じ、又人類に應同したる人佛と爲りて衆生を敎化し玉ふ處から三身と分れて一切の依となり玉ふ。三身とは一法身、二報身、三應身、是である。

法身、梵に毘盧遮那と曰ひ、翻ずれば徧一切處の義にて、宇宙全體を身と爲すの謂である。前に宇宙大心靈と云ひしを宗敎的に表せば法身佛とす。故に宇宙は永遠に活ける法身佛とす。形式としては天の日月星辰の運行より乃至地上の一切生物の生成に至る迄の萬法の大原則の故に法身と名け、內容としては此毘盧遮那の胎內に無盡の性德を具有して萬物を產み出す故に如來藏性と名づく。又法身より產出されたる衆生も

悉く小法身小造物である。夫と共に佛に成り得らるゝ性を有つてゐる。然るに人々の具せる佛性は、喩へば鷄の卵の樣なものにて、之を孵化せば雛子となる如く、衆生の佛性を攝取し靈化して佛と作して玉ふのは卽ち報身佛である。

報身。梵に盧舍那と曰ひ譯すれば淨滿、また光明徧照と云ふ。淨滿とは如來は智慧慈悲萬德圓滿して宇宙最上の位に在まし、紫金の身に無盡の相好を備へ、衆寶莊嚴の淨土に淨樂我淨の園に、眞善微妙の花匂ふ裡に法身諸〻の菩薩の爲に他受法樂を施し玉ふ故に淨滿と名づけ、又光明徧照と云ふは卽ち如來は心靈界の太陽とす。例へば太陽の光熱化を以て生物を化育する如くに、如來は智慧慈悲威神の光明を以て衆生の心靈を靈育し玉ふ。天に太陽なかりせば一切の生物が生存できぬ如く、如來の光明を離れて一切衆生成佛すること能はず。如來光明の德實に無量なれども十二光の中に一切の靈德を具して遺すことなし。委しくは十二光の下にて說明す。

應身。淨界の報身より身を分て此世界に出玉ふ釋迦牟尼佛なり。釋迦世に出で玉ふ本懷は、衆生が闇に迷ひ生死に沈むを憐れみ、衆生をして無限の光と永遠の生命に入るべき眞理を敎へんが爲である。佛陀は八十歲にて入滅し玉へども神は無量壽の本土に還り玉ふ。

凭く三身に分れたるも、唯一の無量光と無量壽の如來なり。

如來の光明

心靈界の太陽なる一切の衆生を攝取し同化し玉ふ光明の靈德實に不可思議なり。一切諸佛は斯光に依りて正覺を成じ玉ふ。一切の萬德を十二の光名に攝めて遺すことなし。釋迦一代の經も悉く斯中に攝す。今略して解せん。

無量光（如來體大にて絕對の大靈態）

斯光は如來の總德を表はし他の十一は別德を示す。如來正覺の光明普ねく十方界

を照して衆生を攝して佛化し玉ふ故に無量光と名づけ、又一切をして永恒の生命を得せしむ故に無量壽と云ふ。經に彼佛光明無量にして十方國を照して障礙する處なし故にアミダと號く。又彼佛の壽命と人民の壽命無量の故にアミダと號く。空間に徧照し時間に徧して遺すことなし。諸佛の正覺を得るとは是無量光を得たるの義にして涅槃を證すとは無量壽に入りたるの謂である。故に三世の諸佛斯光明に依りて正覺を成じ無量壽の涅槃を得玉へり。

無邊光（大智慧の相）

如來四智の大光明徧ねく十方の法界を照して、衆生の爲に知見を與へ、一切智を得せしむ。四智とは、

一、大圓鏡智、斯智光は我等が無明を照破す。喩へば太陽昇りて山河大地悉く顯現する如く、斯光によりて一切の色心依正悉く知見するを得。

二、平等性智、斯智に我等が吾我分別の迷を照破せられて各自の自性は本來清淨にして諸佛と同一平等なりと自覺す。

三、妙觀察智、如來我に入り我如來に入る時我等が迷の意識は轉じて佛智と相應し又如來の身と口と意と我等が三業と冥合して一切種智を與へ玉はる。

四、成所作智、凡夫の麁末なる眼耳鼻舌身は斯光に靈化せらるる時に、佛眼乃至佛身と成るが故に、諸佛の如き相好及び清淨莊嚴の國土を感ずるに至る。

斯四智は凡夫の無明の阿賴耶を轉じて佛の四智に同化し玉ふ作用にてある。

無礙光（解脫の德）

斯光は衆生の弱點なる、煩惱を解脫して至高の道德とし聖き人格卽ち佛と成し玉ふ德用である。如來は宇宙最高なる眞善美の靈界に在し、神聖と正義と恩寵との三德を以て衆生に儼臨し玉ふこと、太陽の光熱化を以て萬物を化育するが如し。

一、神聖、如來は神聖としては道德律の光として至善の靈界に在まし、道德の原則と爲り又至善の標準と爲り、衆生の行道を照鑑し且つ行爲の正知見を與へ玉ふ。

二、正義、如來は我等に邪と惡とを捨て正と善とを選みて向上せしむる勢力を與へ玉ふ。惡を捨て善を取り玉ふ選擇本願とは是である。

三、恩寵、如來は衆生の慈母として一切を愛し佛性の卵をあたゝめて我等佛子を長養し玉ふ。

斯三德は如來が衆生の父母として道德上の聖き人格卽ち佛と爲して玉はる靈用である。

無對光（衆生に正覺と涅槃を證せしむ）

斯光の一切衆生を攝取し玉ふ終局目的は、衆生をして諸佛と同じく正覺を成じ大涅槃に入らしむるにあり。如來と衆生とは本來親と子たるに拘はらず、現に正反對に立てをる。如來は絶對無限眞善美等にして衆生は其反對なる有限罪惡闇黑である。然るに斯光に攝取せられたる終局は、無明を變じて正覺の光と爲り、生死を轉じて涅槃の常樂と爲る。涅槃とは眞善微妙の國に淨樂我淨の花匂ふ處、常寂光土又蓮華藏世界等を以て表せらる。涅槃に三種あり、有餘と無餘と無住處とである。有餘涅槃とは此身有餘の肉體を有ち乍ら神が淨土に安住する位、無餘とは肉體を脫して永恒の淨土に入るを云ふ。無住處涅槃とは、本體は淨土に在りて身を分て生死の中に入て、衆生を度する位、是究竟成佛する時は一切諸佛卽ち彌陀に歸趣するものとす。

炎王光（衆生の煩惱を脫却する力）

一切衆生に齊しく脫却せざればならぬ弱點を持つてをる。通じて煩惱と云ふ。見思と塵沙と無明とである。衆生は煩惱と云ふ動物欲及び意識的の罪惡を有てをる。煩惱から惡業を造り業に依りて報を受く。一心に念佛して佛光に觸るゝ時は衆生の煩惱

及び罪障自から脱却す。喩へば一切の汚物も大火炎に燒かるる如く、光明の作用を譬に名づけたるものとす。

無對と炎王の二光は如來に背き反對せる迷の衆生を攝取して本源に還し煩惱を翻して菩提となし生死を超えて涅槃に入り絶對圓滿の佛と爲す能力である。

無對光は衆生本如來藏性の分れなれども本覺の光に背きて無明の闇黑に向ひ眞理に反して妄惡となりすべて佛とは反對の方に向へり。大御親は迷子を憐むの本願の光を以つて衆生の眞心を開き、本覺の城に還し諸佛平等の位を證し四智圓かに照らし清淨法身常寂光土にありて絶對圓滿の身心土と爲す時、我と彼との相なし、故に無對光と云ふ是畢竟成佛の位なり。炎王とは衆生の煩惱と業と苦とを除滅すること大火炎の諸〳〵の不淨物を焚燒するに喩ふ。

光明を被りたる衆生の心の相

經に若し衆生ありて、斯光に遇ふ者は三垢消滅し、身意柔輭に、歡喜踊躍して善心生ぜんと。又如來の光明は、念佛の衆生を攝取して捨て玉はず等と。衆生佛性の卵は如來の慈光に攝化せられて、從來の闇黑の我は死して、光明の我と生れ替り、心機一轉して靈き人となる。然る時は其心理狀態に於て必ず變化す。人の心は本一なれども作用の上に分類を要す。今四分類して、感覺と感情と智力と意志とす。此心性を開發し靈化する處の如來の光明を亦四分とし、清淨と歡喜と智慧と不斷とす。略して解せん。

清淨光（人の感覺を淨化す）

我ら凡夫の淺ましさは、眼に色を見耳に聲を聞き舌に味ひ身に觸れなどの世の塵あ

くたに汚れるので心の汚れが終に五慾の凡夫に墮落するのである。身體皮の垢は浴みて淨め衣服の染は洗濯して潔くなる。世の塵埃にまみれたる私共の心は念佛心によりて斯光に清めらる。此の快さ潔さは何たる快なるぞ。日に汚さるゝ我らは日に〳〵新にして又新に斯光に浴して快き淨き日暮らしを望みます。

歡喜光

人生苦惱多しと慨く。此世に處し競走激しき世に立ちて眞に平和と歡喜とに眞の幸福のくらしが出來るのは信仰の門を開きて斯光得るのみである。世たとひ形の上には憂怖苦悶は迫り來るとも神はとはに極樂の花の園生に栖み遊ぶことのできる、斯光の生活である。

智慧光

人は全體心の闇きもの一寸先は闇である。自己を照らすの光はない。自己が無智を悟らずして智なりと謂ふからして邪見に陷るのである。

人智の數ならぬを信じて如來の心光を仰ぐ時は心靈界を照らす智慧光は私共に眞理にかなふ智慧を與へて賜はる。私をなくして如來を信知すれば自然と神のような眞理にかなふ人となれる。是斯光の爲めに生存する人である。

不斷光

人の善とか惡とかになるのは其の人の意向のいかゞによるのである。肉慾我慾主義の人は暗き自己にひかれて、知らず惡道に墮落してしまふ。一心に念佛して斯光によりて如來の聖意をうる時には、無上道に導く不斷光に動かされ眞正の勇氣を以て永遠の光明に向つて向上し如來は私共の靈の父母とし我手を携へて至善圓滿の聖き國に進ましめ光明中の活動をなさしめたまふのは斯光である。

人の善とか惡とかに分るゝのは其人の意志の如何によるのである。意志をみちびく光なく目的の光なければ肉慾や我慾の闇にひかれて知らず〳〵惡道に墮落するは人の弱點なり。終局目的の光明無上道に導く不斷光によれば心も常に勇氣も出て勇み進んで向上し至善の目的に進まるゝのである。如來は父母にて我手を引きて日々に向上させ下さるのである。それで光明の生活と光明の活動が出來るのである。

光明行爲の三階

前に大**ミオヤ**の光を受けたる人の心の狀態を四分類して話しましたが、それにはいかにして光明を得らるるのであらう。また初發心より階段なしには圓滿なる光明の生活行動は出來ぬでせう。この問により此には光明行爲を三階に位を立て大**ミオヤ**の子の一分を爲すのである。

難思光

吾等は理に於ては如來の一分子なる子には相違なきも、無明に眼盲て光明の眞理を知ること能はず。光とは如何なるものか意識する事能はず。故に難思である。彌陀の威神光明の眞理を聞いて、或は朝夕の禮拜、又は聖典をよみ、また聖名を以て恩光に接せんことを祈り、或は瞑想觀念に神を凝し、または先輩の經驗を聞くなどして、

心光に接せずんば止まずとの一心だにあれば、或は頓速に或は漸次に光明を實驗することを得。初めて光の覺醒をなすを喚起の位として初階である。

無稱光

前の喚起は植物に例せば彌陀の聖種を播き下して陽氣にあふて萌發したようなもので、信根益發達してつひには麗はしき花の輝き咲くにあふ如く、漸次に信念精進向上には光明心の花開き其麗はしさかぐはしさ譬ふるに物なし。如來光明大我の中の感情狀態は靈妙交感歡天喜地其の妙味はとても言を以ては詮表すことは能はず。故に無稱光と云ふ是心光開發の位を云ふ。

超日月光

光明體現の位。已に光明の人となりし上は聖となり然る上には身口意三業に爲す處悉く光明の活現として働く。

昭和五年十一月廿五日　印刷　　誌代郵稅共
昭和五年十一月廿八日　發行　　年貳圓
編輯兼發行人　山崎辨成
印刷人　牛込區早稻田鶴巻町四〇三　小林七太郎
印刷所　牛込區早稻田鶴巻町四〇三　靜文社印刷所
東京市小石川區水道端二丁目四十四番地
ミオヤのひかり社
振替口座東京六六八五一番